

事例研究報告

特別支援学校高等部生徒に対する 友達と適切に関わるための指導に ついて

「ありがとう」と言ってありがとうカードを渡そう

生徒の実態

<コミュニケーション面>

- ① 発音が不明瞭である。例: にじ→にし等
- ② 言葉での伝達が上手くできない場合は、単語か二語文で伝えたいことを書いて表現することができる。
- ③ 嫌なこと、やりたくないことには手を振って拒否を表すことができる。
- ④ 好きな教員やごく親しい友達には自分から話しかけて要求を伝えたり簡単な会話を楽しんだりすることができる。それ以外の友達に自発的に話しかけることは苦手。
- ⑤ 2年生になってから、親しい相手以外の友達(同年代の人)と関わろうとする様子が徐々に見られるようになってきた。

保護者の願い

- 自分の役割を理解して毎日継続できるようになってほしい。

教員の願い

- 友達と関わる場面を今以上に増やすとともに、その際のやりとりにおける適切な態度等を身につけてほしい。
- 自分から友達に話しかけることができるようになり、教員が間に入らずにやりとりができるようになってほしい。

アドバイザーからの助言

- ① 発音が不明瞭でも、絵カードなど物を使うことで、円滑にコミュニケーションを行うことができる。
- ② 「ありがとうカード」を用意すれば、相手が生徒の言葉を聞き取ることができなくても、やりとりができる。「どうすれば相手に伝わるか」「伝えやすくするか」である。どんな形でも相手に伝わればよい。
- ③ 言葉以外のコミュニケーション手段(身振り手振り・拍手・ポーズ)を指導することがよい。

助言を受けての見直し

- ① 目標を「朝食調べに答えてくれた友達に対して、ありがとうと言い、ありがとうカードを渡すことができる」に決定した。
- ② 「ありがとうカード」を作成し、友達に「ありがとう」の言葉を視覚的に伝えることができるようにした。

指導の手続き

手順を次のように設定した。

- ① クラスメイトに対し「〇〇さん、おはようございます。今朝はごはんとパンどちらを食べましたか」と書かれたセリフ表を見ながら朝食に何を食べたか尋ねる。
- ② 友達が答えてくれたら、セリフ表に貼ったありがとうカードを取り、「ありがとう」と言いながら、カードを渡す。
- ③ 「ありがとう」と言えない、ありがとうカードを渡せない時は、教員が言葉がけを行う。

記録方法と記録

評価基準

- 教員の言葉がけなしで、「ありがとう」と言って、相手にカードを渡すことができる。3点
- 教員の言葉がけがあれば、「ありがとう」と言って、相手にカードを渡すことができる。2点
- 教員の言葉がけがあれば、「ありがとう」と言う、カードを渡すことのどちらかができる。1点
- 教員の言葉がけがあっても、「ありがとう」と言う、カードを渡すことの両方ができない。0点

達成基準

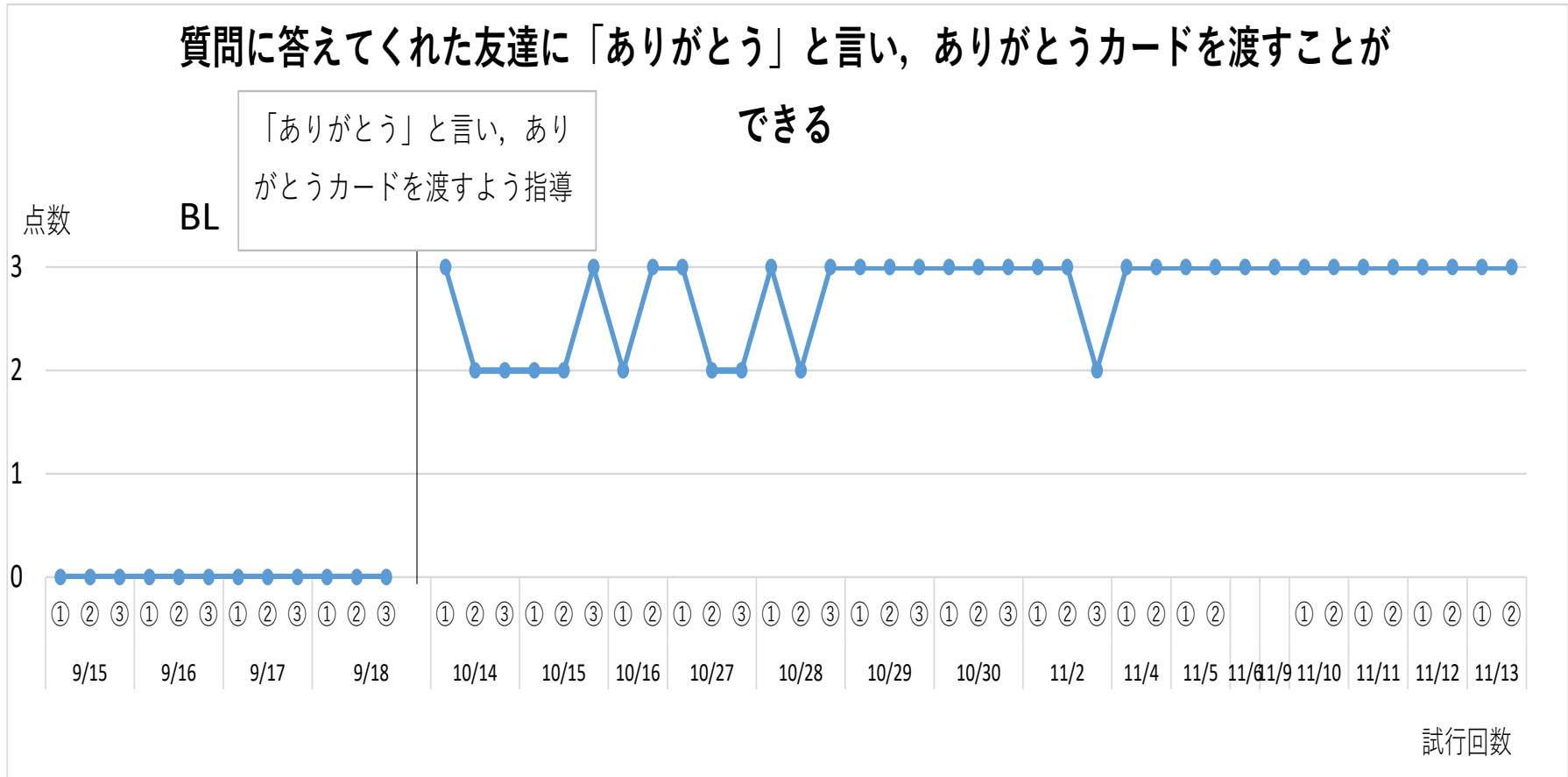
1週間連続で、クラスの全員に「ありがとう」と言いながら、カードを渡すことができる。

評価方法

ありがとうカードを渡すことができたなら、「上手に渡せたね」と言語称賛を行う。

朝の会で朝ご飯調べの発表場面を作り、友達からありがとうカードをもらう機会を設定する。

指導前後の記録



指導の成果

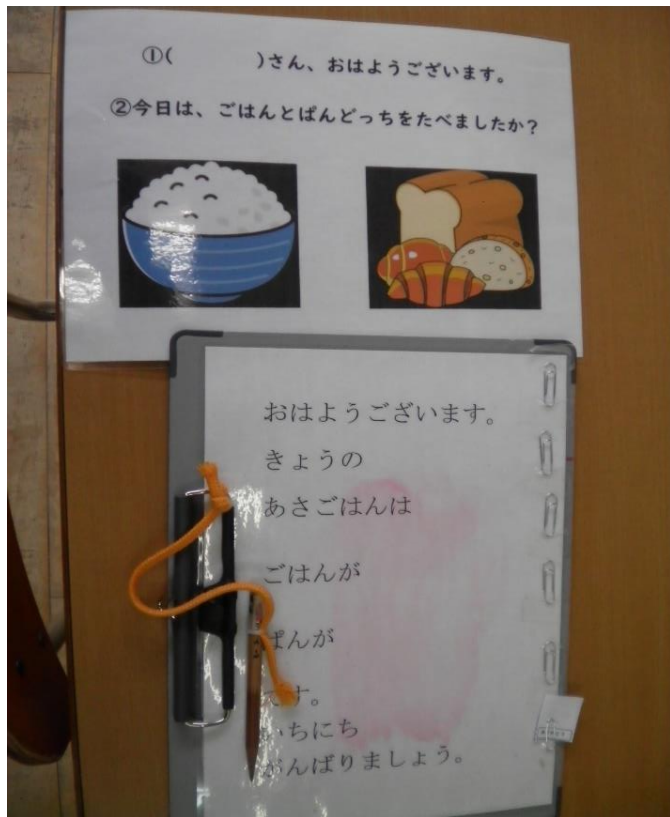
- ① 毎日、必ず友達との適切な関わり「挨拶や会話の機会」をもつことができるようになった。
- ② これまで話しかけることがなかった教員・生徒へ「おはようございます」と自分から話しかける様子が見られるようになった。

ここが成功のポイント

- ① 本人が楽しく取り組める活動の実施(朝食調べ)。楽しく、自分から進んで取り組むことができる活動内容のため、これまで関わりの少なかった友達を含めたクラスメイト全員に、自分から話しかけることができた。
- ② ボードや絵カードなど視覚教材・コミュニケーションツールの活用。発音が不明瞭なため、ごはんやパンのイラストを使用して聞き手にも一目で質問内容が理解できるように工夫した。
- ③ 活動に対して友達から「ありがとう」と称賛される機会を設定することで、意欲や達成感を高めることができた。

視覚教材の実用例

セリフカード



ありがとう カード



みんなで教室壁面に掲示

